
歌が上手な転校生

臨奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歌が上手な転校生

【Zコード】

Z6785U

【作者名】

臨奈

【あらすじ】

ボンゴレファミリー10代目ボスが通う並盛中に転校生がやってきた！！それは歌が上手な、、黄色い髪の双子！？この一人が次々に呼び込む嵐をツナはどうするのか！？

鏡音来るー！（前書き）

自分が大好きな鏡音姉弟とREBORNーをコラボしてみました
楽しんでいただけるとなによりですww

では。。どひど～ノノ

鏡音来るーーー！

「おはよー、シナベさん！」

「京子ちゃん・・・おはよーーー！」

「知ってるーーー今日ね・・・」

キーンゴーんカーンゴーん

京子の言葉をわけわけるようにチャイムが鳴った。

「あ・・・京子ちゃん、なーーー？」

「・・・ぐーんーなんでもないーお楽しみの方がいいもんねー

「？？」

俺は沢田綱吉。

普段はダメダメな俺だけど、実は巨大マフィア、ボンゴンゴンゴンゴーの10代目ボス候補だ。なりたくないけど・・・

今は珍しく平和な日々を送っている。

わざわざの京子ちゃんの言にかけがきになるけど・・・

「おい、席つけ！今日はな・・・あれ？？」

先生、なにジアの方氣にしてんだ？？

おかしいな
・・・・・
ひ
!!!!!!

！？先生！？

なに今ふーかーたの！？

「いつたあ～・・・・・」

その声に教室が一気にざわついた。

- ! ? ?

なんだあの黄色い髪の子！？

「あ、あの子かなあ・・・転校生！！」

「転校生！？京子ちゃん、ホント！？」

「でももう一人いたはず……あ！」

京子ちゃんの田線の先を見てみた。

え・・・！？また黄色い髪の・・・男の子だ！！

ドアの近くに少し癖のついた黄色い髪を後ろでキュッと結んだ男の子がスラリとたつていた。

その瞬間教室の女子が一斉に顔を赤らめた。

「！」ひ鏡音！－－遅刻したついに教室にダイブするな－－！」

「すいません～！」

もう一人の女子は黄色い髪のわきをピンでとめていた。
よくみるとかわいい···。

今度は男子たちがその辺に注目してた。

「俺ダイブしてねえし···」

男子の方が口を開いた。
ツナはこいつ思つた。

「きれいな声···」

「え？？」

俺が今思つたこと···

横にはボーッとした京子ちゃんがいた
京子ちゃんが言つたのか···

俺はちよつとムカッとなつた。

「えへ···転校生だ！自己紹介してもいいわー。」

「えへと···鏡音コンですかーー。」

「レンです···」

「双子です！…よろしくお願ひします…！」

みんなは大盛り上がりだつた…・・・

*

俺たちの教室は今までにないほど集まつていた。

学校一人気な京子ちゃんや、爽やかで女子に人気な山本、、獄寺君に興味を持つてる女子も少くない。

そして鏡音姉弟・・・

2人は一日たたないうちに学校中の注目を集めた。

よりによつて俺の後ろが鏡音弟〜・・・！
休み時間は女子がうるさいし・・・！・

「レンちゃん！」

「あ、、京子ちゃん！…！」

あの一人はさつそく仲良くなつて・・・
それに比べて俺は・・・

レンの方をチラッとみるとイヤホンで音楽を聴いていた。
長いまつげを伏せて、その隙間から緑色の瞳が見えていた。
女子が騒ぐのも無理ない・・・

「てねえ・・・」

獄寺君なんでそんな睨んでんの～！？
レンは緑色の瞳だけを獄寺の方に向けた。

「おまえあれか？！どつかのファミリーのスパイか！－イタリアとかから来て10代目を・・・・」

「獄寺君っ！！！！！」

レンがツナに目を向けた。

「あ・・・」「あ・・・」めんねーー急に変な」と言つてーー

別に、面倒なことはないね、

レンは少し笑って言った。

「…もしかして………せん、名前覚えたの！？」

「覚えたよ、君。沢田君だぞ?」

す」「!!あ、ツカでーーよ!!」「

……ジヤあ……ツナの氣になる子は篠川さんかな……？」

レンはくすくすと笑つた。

(「Jのガルー……10代皿と仲良くなっちゃがって……」)

「あ、、シナくんたち……レン君と仲良くなつたのかな……？」

「京子ちゃん、、シナくんついて？」

「今レン君と話してた子だよ……」

「……横の、銀髪の子は……？」

「……ああ！ 獄寺君だよ！ 怖そりだけビホントはいい人だよ……」

「やつなんだ……」

リンは獄寺をじっと見つめていた。

「獄寺……君……」

「Jの鏡音姉弟は並盛中に風をよび」んだ。。。。

鏡音来るーー（後書き）

最後まで読んでくれた方へありがとうござります
がんばって更新してこきますーー！

次回もよろしくおねがいします ～

雀雀来るーー（前書き）

2回目で「いやーこます」
アクセス沢山でびっくりしました
本当に、「ありがとうございます」といいます
わい、今回はソンが主役です
どうぞ

放課後、リンは学校中を駆け回っていた。

(誰もいないところ・・・)

そして一つの部屋が田に入った。

リンはあたりを見回して誰もいないを確認すると、大きく息を吸つた。

「何してるの……？」

！」

「君か、、黄色い髪の転校生・・・その色は校則違反だよ」

……あり、この、これほ、地毛で

リンせ田の前にいる学ラン姿の駅をぱーっとみた。

そう叫ぶと全速力で走り去ってしまった。

廊下をかけながらリンは顔を真っ赤にしていた。

（「JJKの制服学ランジじゃないでしょ！？？つか・・・あの人カッ
「よすぎでしょ！？？）

ドン

頭がぐちゃぐちゃのまま走つてたら誰かにぶつかってしまった。

「つた～・・・・・・あ。てめつ・・・・！」

「あ」

（怖そうな人だけど実はいい人、髪の毛の色が興味深くて、お友達になつてみたい獄寺君だ！）

「おまえレンツでやつの・・・・ビツでもいい！－！10代目見なか
つたか？！」

「10代目・・・？？」

「あ～・・・ヘルシーナンセンス！」

そう言い捨てると走り去ってしまった。

「10代目つて誰？？？」

リンは誰もいなくなつた廊下で呟いた。

「おこ」

少し低めの声がリンを呼んだ。

「レモン！」

「何してんだよ。また歌うとこ探しか？」

「・・・！－！悪いかつ－！」

「別に。
好きにしろ。」

少し笑つて言つたレンをびっくりしてリンは見つめた。

「まあ、俺もいいことあつたんだよ。」

「ツナくん！？」

「さあな」

やつぱりレンは笑つてた。

リンも心の底から笑つた。。。

この2人とつてに友達ができるとこ「うのはす」へ、何よりもうれしいことだった。

今までいなかつたから。。。

「あいつらだな。例の転校生は。姉の方は運動神経抜群のようだな。
弟の観察力と記憶力も半端じゃない。。。。」

木陰に隠れた1人の赤ん坊がニッと笑つた。

「面白くないそつだ。

」

雲雀来るーー（後書き）

ありがとうございました
読んでくださった方に心から感謝です

また、次回もよろしくお願いします

超直感来る---(前書き)

あ、、タイトル意味不明？？
気にしたらいけませんよ

今回も来てくださいてありがとうございます
ぜひ、、よんに行つてくださいww

「レンたちもう放課後はいなかつたなー・・・」

そう呟きながらシナは家に帰っていた。

「ツナ」

横から声がとこできてビックリした。

「リボーンーー。」

「相変わらずアホ面だな」

「うぬせこなーーってこつかまた学校についてきてたんじやないだ
わつなーー。」

「そんなことほどでもこいだら。おおえ、これは肌離さず付け
てろって言ったる。」

リボーンがポンコレリングを差し出してくれた。

「あ・・・ーー隠してたのにーーなんでつけなきゃいけないんだよーー。」

「ーー。」

「そんなの決まつてるだろ。お前もつすべマフィアのボスになる
んだぞ?」

「んなつ！？なりたくないってばーー！」

「んな」と言われたつて9代目からもう・・・」

「ツナ・・・・？」

向ひのせつから声が聞こえてきてその声にツナは冷や汗をかいた。

「レン・・・・！！」

レンは歩いてた動きが止まつたまま、ビックリした表情だった。

きいてた。・・・?

シナはおやるおやる聞いた。

きいてた
・
・
・
・

レンは真顔で答えた。

「じょ、冗談に決まってるだろ！本気にしてないでしょ！？」

「すいぶん仲良くなつてゐるじゃねえか。」

リボーンが小さくつぶやいた。

「え？」

「そうだ、このダメツナは大マフィアのボスになるんだぞ。」

ツナは少しハッとした。

（リボーン・・・わざと聞いた・・・？）

「・・・・」

レンはポカンとしていた。

「そんなこといつたって信じるわけないだろーー？」

ツナがリボーンに小走りで言った。

「信じられないけど・・・」

レンが口を開いた。

「ツナはなんか特別な気がしてた。」

リボーンがニッと笑つた。

「おーツナ」

「は？」

「ここにも超直感もつてゐるや」

「はあー？」

超直感来るーー（後書き）

最後までありがとうございました

こんかいちゅうと短め　ｗｗ

まさかの展開　ｗｗ

まさかのブリックオブボンゴコレ　ｗｗｗ

このあとどうなるんでしょうな
次回もよろしくお願いします　ｗｗ

～ボンバーの血来る～～（前書き）

遅れてスイマセン～～～～～

そして題名また意味わからなくて「めんなさい」（笑）

では、楽しんでいってください

～ボンゴレの血来る～

「な、何言つてんだよりボーン！？」

「言つた通りだぞ」

「？」

レンは2人についていけない。

（レンが超直感！？は！？超直感はボンゴレの血・・・・は！？）

「俺も少し調べたんだ。証拠はねえが、つじつまは合つぞ」

「なんだよ？！早く言えよ！？」

「まあこんなところじゃなんだ。ツナんちいくぞ」

「俺んちかよ？！」

レンは黙つて2人について行つた。
行つたほうがいい。

そう・・・直感していた。

「とりあえず」んな感じだ

ツナは巨大マフィア、ボンゴレファミリーの10代目（候補）だと
いうこと、守護者のこと
すべてを話した。

レンはたいしてビックリしてなかつた。

「お、驚いた・・・？」

ツナがおれるおれる聞いてみた。

かっこいいじゃん

んなつ！？

予想外の答えにツナの表情はマヌケになつた。

「うからだぞ。よく聞けよ鏡音レン。」

レンとツナが真顔になつた。

「今話したポンコツファミリーのボスは、もともと2つの一族がその座についていたんだ。

たがある事件のせいで、そのうちの1つの一族が壊滅した。そして今残っているのがツナ側の一族つてわけだ。」

(俺側
・
・
・
?)

「俺が調べたところ……レンはその壊滅した一族の唯一の子孫だ。」

場の空気が、一瞬冷めた。

「で、でもレンは……？」

レンは動搖を隠しきれてなかつた。

「お前らは双子だろ？ だつたらリンも、子孫だ。だがレンのほうが覚醒は早いな。」

「超直感……」

「さうだぞ。だからレンにもボンゴレの血が流れてるんだ。」

「知らなかつた…………何も…………」

レンが俯いてしまつた。

「レ、レン……」

「そりや、まだ子孫がいたと知れたら戦いの火種になるからな。」

「……」

「でも大丈夫だぞ。いまのボスはボスの座に執着心がまるでないからな。」

「あつー当たり前だろーーー？」

「INのINと、リンにも話せなきや。」

「そ、そつだね。オレも行くよー。」

*

「IN-IN・・・・INの?」

レンたちが来ているのは真っ青な海が広がる静かな公園だった。

「コンは、つもINで・・・・・」

「どこからか歌声が聞こえてきた。

「ホラ」

「リンだ。」

透き通るような歌声だけど、力強くてINまでよく聞こえる。

「キレイ・・・」

ツナがぼーっとしてると、

レンもそれに合わせて歌い始めた。

そしてリンのほうにゆっくり歩き始めた。

それに気づいたリンはレンの声にのっかり、2人で綺麗な旋律を奏

で始めた。

そこだけ空気の色が違つようだつた。

美しい、綺麗、

では表現しきれなかつた。

今まで普通に暮らしてきた2人・・・・

ボンゴレの事実を知つてしまつたら・・・・

もういつも過ぐしてたような日々は戻らないだらつ・・・・

歌が上手な転校生は、

マフィアでした。

～ボンバーの血来る～～（後編）

ふう　ｗｗ

最後まで読んでいただき、ありがとうございました

次回も、、ぜひひよひよしてお願いします

～山本来る～（前書き）

お久しぶりです
1ページに来ててびっくりです（笑）
ありがとうございます！！

では、～どうぞ～

山本来る！

「なーなー、山本！お前のクラスにまた転校生来たんだろ！？」

「あー、、、まあなー！」

山本は放課後、グラウンドで部活中だった。そこに野球部の男子が1人、話しかけてきた。

「学校中で噂だぞ！山本とどりちがモテてるか！？」

「ん？俺？ハハツ！！なんかおもしれーのな！」

(わかつてねえだろ)いつ・・・・)

山本は野球部で人望が厚く、リーダーシップがある。
その上底抜けに明るく、爽やかだ。運動神経もかなり良くて背も高い。

今日も部活を見に来てる女子は結構いた。

「山本く~ん！！！」

女子が精一杯手を振つてきたから山本は笑顔で返した。

「やー！応援されるってのはやっぱいいもんだなっ！」

(「いつど」まで天然なんだ・・・・!?)

*

公園にはリン、レン、ツナ、リボーンの4人がいた。

「リンちゃん……大丈夫？」

シカは心配せへばのを抱こんだ

「… よな… ケレ… ヒッ…」

レンも心配そ二た

卷二

卷之六

リソガ急に照れくさそうに笑にかしが

卷之三

「人たる!」

）の予出本並しやなし！？

「それに綱吉君や、同じクラスの獄寺君とか山田君とか・・・い
っぱいいるんでしょ??

「山本ね……あと京子ちゃんのお兄さんや風紀委員の雲雀さん……」

リンは「風紀」が頭の中にぽんやり浮かんだがなんだか思い出せなかつた……

「あとうづせぇ牛ガキもいるだ」

「リボーンちゃんはそんなかわいい顔して世界一の殺し屋なんだよね……」

「ああ、やうだぞ。」

「なんかこれから楽しくなつそうだね……」

(コン……)

レンだけは、まだ心配そうにしていた。

*

「リン……シヨックだつたんだり? 無理すんなよ」

レンは家に帰つてからコンに言った。

「……何言つてんの……楽しうじやん……」

「マフィアの意味ぐらいわかるだろ?俺たちは今まで一般人だつたんだ。驚かないほうが……」

「楽しげって思わなきゃ 人生なんか真つ暗だよ……………」

リンが叫んだ。

「リン…………」

リンが我に返つたよつて表情が落ち込んだ。

「ゴメン…………でも、やつ思つて生きるつて決めたの。」

リンは作り笑いをして言つた。

「やうだな…………俺がいるから…………大丈夫だ…………」

リンはやつ言つてリンの頭を優しくなでた。

「うん…………」

*

次の日も学校はいつも通り終わつた。

リンはふと窓の外を見た。

そこには野球の練習をしている野球部の姿があつた。

「リン～～帰るぞ～～！」

「レン～～野球していきたい～～！」

「はあ！？」

「リンちゃん、野球できるの？？」

「京子ちゃん！！大好きなの！！野球部の人知らない？」

「山本君が…あ、もう行っちゃったかな??」

・山本・・・!!?あいかど!

もう誰かと申すことはござりませんでござつてござつた。

あいには近づけねえな

レ、たあきれた彦で言つた

リンは大声で叫んで山本を呼んだ。

「靈鏡」一隻

女子の痛い視線なんてお構いなしだ。

「なんだ？」

山本がこいつを向いた。

「野球やらせてえー……………」

リンが発した言葉はみんなの予想外で周りは啞然とした。

「ハハツ！女子でもいるんだなー！いいぜーーー！」

「おーいのかよーーー山本ーーー！」

「あの子たぶん相当や」こぜーー！」

「なんでもんなことわかるんだよー？女子だぞーーー？」

「なんとなくなつー！」

(ダメだこいつ……)

いつの間にかジャージに着替えたリンがグラウンドに入ってきた。た。

～山本來る～（後書き）

まさかのリンが野球参加！？

次回はドキドキハラハラだあ～！！

読んでくださってありがとうございました

次回もよろしくお願ひしますw

～初恋来る！～（前書き）

リンが野球やり始めた～；；

はい、～こんなに忙は～

毎度ありがと～♪や～こまする～

リンは右脳派なのです（ワ）

でせどり～～～

～初恋来る！～

「ほほーーやる気満々なのなつーー。」

「当然よーー。」

野球のコートフォームを着た爽やかな少年と、強気で好奇心にあふれた目をして、いる美少女の話している姿は、キャラニーの注目を一気に集めた。

(俺らはもはや影だ・・・)

その他野球部員の思い　ｗｗ

「あのかわいい子、転校生だらーー、野球できんのかよーー。」

「山本くーん！ーーーーー。」

歓声が飛び交っていた。。

「コンチケヤン！ーーー。」

「何やつてんだよ。。。つたぐーー。」

レンや京子やツナも来ていた。ツナが来てればもちろん獄寺も。

「んじゅーーやるかー。」

「お互いの、お手並み拝見ね」

山本がピッチャーだ。

リンはバッター。

2人の気迫に周りがのまれた。

「あの二人・・・本気だぜ・・・」

山本が投げたボールはすさまじい速さでリンの方へ向かった。

「レン！！大丈夫なのリン・・・！」

「まあ野球は・・・」

キインツ

ボールが高く、飛んだ。

「いんだけどさく、人の目を気にしてほしいよね。」

慣れ切ったレンの口調で、なによつもコンが山本の速球を打ち返したのに口を開けて驚いていた。

「やつ

山本は悔しがつているようだつた。

高く上がつたボールを見届けるとコンは猛スピードで走りだした。

「早つ・・・・!・・・!

周りが唖然とした。

そしてリンは2塁に滑り込んでセーフ。。

「やつぱは山本君の球をホームランはむつかあーーー!」

「やつぱつなつー!」

「山本の勘当たつちやつた・・・・・・」

「すげえよあの子ーー!」

歓声が沸き起つた。

「ははつーおもしれーやつがきたのなーー!」

「君たち……騒がしいよ……」

静かな声がギヤリコ一全員をひざました。。。

「ひつ、雲雀わん……」

（しまつたー！風紀委員を怒らせたー！）

（殺されるや……）

「がつー・学ラン王子ー！…………！」

リンが叫んで周りが固まつた。

「あの子何物……！？」

「やべえぞー！」

周りの厳しい表情などリンには見えていなかつた。

リンが雲雀の方に走つて行つた。

「また君？いい加減にしてくれるかな。僕の眠りを妨げるなどどうなるか知つていいかい？」

リンはボーッとしてたがやがて口を開いた。

「好きですっ！？」

「え？」

「あ？？」

「！？」

「え」

周りがひどく冷え切つた空氣になつた。

～初恋来る！～（後書き）

言ひや たよりん～ww
(作者的には超おもろいww)

さて次回・・・・w

どうなるんでしようね～

読んでくださってどうもでした～

アリヴェデルチw

～黒レン来る～（前書き）

前回、～、言っちゃいましたね～（笑）
つつか、～、このあとの展開どうしよ～www

リクエストも受け付けますヨ（笑）

注意！！！

今回、レンのキャラが変わります！レンのイメージを崩したくない
方は、～、
遠慮した方がいいかな・・・？

大丈夫な方は、～、どうぞ～ノノ

～黒レン来る！？～

信じられないほど人が密集している場所は、
、
、
、

信じられないほど静かだつた。

「あの子なんて言つた・・・・・！？」

「ただもんじやねえぞ！？」

次第にざわついてきた。

「はつ」

リンは我に返つたように雲雀から目線をそらした。

見るからにぬけぬけてる。

しかし雲雀はそんなリンを表情ひとつ変えず上から田線で見下ろしていった。

「君たちに付き合つてゐ暇はないんだ。さつさと戻なんないと、咬み殺すよ。」

「みんな戻れ～！！！！！」

ギャラリーは全員散ってしまった。

雲雀も校舎の中に戻っていました。

残つたのは、レン、ツナ、京子、山本。

そこにKYOUな自称右腕の獄寺がやつてきた。

「10代目～！～・・・アレ？どうかしたんスか？」

（超空氣読めてねえ～！！！！）

レンがリンに近づいた。

「・・・・・リン・・・・?？」

「うう・・・・」

リンがしゃがみこんだと思つたら上を向いて大声で叫んだ。

「ふられたああああ～！！！！！！！！！」

「あの子なんかすげーな・・・・」

山本はもう感心氣味だった。

「なんだあいつ・・・？」

「あれ・・・ふつたつて言ひのかな・・・?」つむの雲雀がさじやん

ん?」

「アリだよね〜・・・でもリンちゃん何も知らないこと細ひつ・・・

「だよね・・・」

「えつー? さうなのー?」

さつさ大聲で半泣きで叫んでたリンの面影せざいひもしない様子だつた・・・。

「やうだよー雲雀さんはみんなにやつ・・・つてかああいいう性格のー群れるのが嫌いな・・・」

「つていうか雲雀が好きって・・・お前大丈夫か?」

「うーん・・・私すぐ右脳で動くから自分の動きに考えがついていかないの・・・」

((ある意味危険だぞここつ・・・))

「コンは昔からひうだ。でも今回みたいなのはないな。。。だいたい怖いくせに乱暴なガキにケンカふつかけて勝つて帰つてきたり、やつた」ともないサーフィン一瞬でやつたり、いいことばつかだ

*

つたから。」

「…………」「

一同、ツツコみも忘れてしまった。

「雲雀さんかあ～、ひ、ば、り、さん」

（（ダメだ・・・・・））

「リンも初恋か」

リンが真っ赤になつた。

「はつ・・・・・・・・！」

「ふふつ、リンちゃんかわい～！」

「雲雀はむりだぞ・・・・・」

みんなで話していたら教室のドアがバーンと大きな音をたてた。

「ツナわあ～ん！――――――」

「ハルちゃん！」

「げつ、ハル！――なんで学校来てんだよ――」

「だつて、家に行つてもツナさんいないんですけどもん――」

「だからいつてくるなよ・・・」

「はひつーその黄色い毛髪の美少年少女は・・・もしかして転校生さんですかっ！？？」

「無視すんな・・・」

「やうだよ。レン君とコンちゃんー双子なのーーー！」

「・・・」

「はひー・・・！ハルですよじくお願ひしますねっ！」

ハルがレンとコンの近くに行つてあこがれをした。

そしたらレンがしばらくハルを見つめっていた。

「はひ？ハルのカオになんかついてますか？」

するとレンがハルの髪に触れた。

「かわいいね・・・」

転校してきたことのないレンだった。
立っているだけで注目を集める容姿なのに、さらに挑発的な目でハルを見上げた。

「……………」

(ダメですか…ツナちゃんといつのがいるといつのがいる…)

ハルが一気に赤面した。

周りのツナたちまでもがレンの様子に驚きつけだった。

「あ、レンのスイッチ入ったね」

「「「スイッチ?」」

「いつや〜厄介だね〜…ハルちゃん」

～黒レン来るー～（後書き）

レンが・・・
ww

ちょいと黒に染まった（笑）

黒くするの楽しいですね（笑）
www

では、次回もよろしくお願ひします

～特訓来る！～（前書き）

レンもなんだかね・・・ww

今回も来てくださってありがとうございます
みんなさんが読んでくれることで私のパワーがヒュンしますw()?
では、、どうぞ～w

「特訓来る！？」

「「ハルが好き！？」」

「たぶんね～」

朝早くからいつもツナ、京子、獄寺、山本、そしてリンが教室で話していた。

レンはいない。。。

昨日のレンのハルに対する様子は・・・・・

すごかった・・・・・

「レンってあんなに変わっちゃうのか・・・・・」

「照れるのと反動でなんか挑発的になるんだよね～。ハルちゃんかわいいから」

「つたぐ、双子は2人そろって忙しい奴だな！雲雀にあのアホ女とは・・・！」

「双子だと好きな人ができるタイミングも一緒なのかな～？」

「雲雀さん・・・・・下の名前なんていつのー？」

「え～っと・・・・・？」

「なんでしたっけ・・・・・？」10代目・・・・・

「やつはあこの下の名前聞いたことないな！」

「でも（ある意味）有名だし。。。他の人に聞いてみればいいよ！」

「え、・・・・・、守護者なのにしらないの、！？」

「あつ！ そつ言えば獄寺君たちに・・・」

「大丈夫つす10代目！」

「小僧から聞いたぜ！」

一 リ、 リボ ー ン か ら ！ ？

「あー！！！そ二だ！！今【リボーンちゃん】と約束があるんだ二た！！！」

んな!? リボーンのやーなにを・・・!」

なんかせんじへとか・・・?」

戰力！！！

「あいつー！！」

ガラツ

「おせよつ鏡音君……」

「おはよ

レンから黙恋に色氣（？）がでた……

「まだハルを見たときの雰囲気だ……」

「今日はヤバそうだな……」

「ねえねえ鏡音くん……」教えて……

「いいよ

（（わや～……／＼／＼／＼））

ツ（なんかもつレンが女たらじつぽく……）

獄（俺聞かれたことねえ……）

今日一田学校ではこんな感じのレンだった。

*

「んで？？リボンちゃん！何するの！？」

「まあな。レンよりお前の方が運動神経は上だから手っ取り早いんだ。」

1
?

「これに着替えて来い」

「道着・・・・・？」

「特訓だぞ」

リボーンが拳銃を片手に一いつと笑つた。

レンが家に帰つたら家の前に小包が置いてあつた。

(なんだ・・・?)

六

～特訓来る！～（後書き）

今回ちよつと短めかな・・・？

レンが危ういものをもらつたみたいですね。。。w
リボーンが動き始めた！！

今後のリン＆雲雀、レン＆ハルの展開もお楽しみに！

ではー最後まで読んでくださいありがとうございました～

～双子の木能来る！～（前書き）

わあ～、～、レンに晒けられたものはなんだあ！？
リンヒリボーンはなにしでる～！？
いろいろ気になります～～～
え、気にしねえって？そんなことこねず～～（笑）（ ょくやね～～
ターン～～～

では、～、どうぞ～～～

～双子の太能来る！～

「やっぱ飲み込み早いな。完璧に近いぞ。」

「やつたあ……武道つてあんまやつた」となかつたけび、樂しげに
「……」

「じゃあ形はOKだから力をあげや。」

「力～？」

「ああ。パンチやキックを強くしろ。だれも敵わないくらいこな……
。」

「オッケー 楽し～！」

「じゃあ後は自主練だ。俺は他にやる」とがあるからな。1週間後
にはそのサンデバック粉々にでもねらいじとけよ。」

「なんか燃えるね～……よつしゃ～、わかつた……」

*

「つたくワボーン～ゼリこつたんだよ～コンにな」セカンドだよ～
」

(オレたちの道場貸してって言われたけど……秘密つて約束だも

んなつー（）

ひそかに想ひ山本だった。。。

『お前の役目はこれだ。しっかり使えるようになれよ。俺も直々に特訓してやる。待ってる。リボーン』

（これもマフィアだからか・・・？）

「役目ってなんだよ・・・！？なんで拳銃はいってんだー！？

ピンボーン

「リボーンかー？」

「ちやあっす。」

「おこーーー！れどこーーー！だーーー？」

レンが包みに入ったままの拳銃を指差した。

「なんだ？まだ試し打ちもしてなかつたのか？」

「民家だぞ……」でじゅうてこいつんだよー。」

「まあそれもそつだな。よし、それ持つてつこでこ。」

「持つのー?俺がー?」

「他に誰が持つんだ。」

「ちよつと待てよ。・・・。」

レンはあわてて拳銃を持って服に隠すとリボーンにあたふたとつて行つた。

「お前の持つてるのはまだオートマチックのベレッタM92だ。」

(べれっ・・・?)

「そのうちなんでも使えるよ!特訓するからな。」

「ついたぞ。」

「ーー。」

そこには遠くに時がずりつと並んでいる黒い部屋だった。

「俺はよくここで腕磨きする。教えたのはお前だけだぞ。」

「俺・・・だけ・・・?」

「俺が目を付けたんだ。お前は相当スナイパーの素質がありそつだ

かりな。

「スナイパー！？？」

「まあとりあえず撃つてみろ。使い方はわかるはずだ。」

！」

レンは「わかるはず」というリボーンの言葉に一瞬表情を曇らせたが、拳銃を上にあげた。

的に向けて狙いを定めた。

（さすがだな。姿勢も完璧だ。）

バンツ！！！！

的の右端にあたつていた。

「最初はこんなもんだ。あたる方がすげーぞ。」

レンは拳銃を見つめていた。

それを見抜いたリボーンが言った。

「ここでなら好きなだけ撃つていいからな。でも拳銃はここに置いて。まだ撃つていいのはここだけだ。」

「わかった。」

レンの目が輝いているのをリボーンは見抜いてニッと笑った。

*

「つたく～、もうリボーンのやつ～」

「いいじゃないスか10代目！…リボーンさんのことだから何か考
えてるんですよ…」

「こつも口クなことにならない・・・」

「しつかしあの双子がボスの末裔とはな～・・・」

「俺も驚いたぜ・・・」

「・・・・・・」

少しの間公園で話していた3人の沈黙が続いた。・・・・・

「あ、ボス」
「…クローム…」

「なにしてんだ？？」「なんど」「で…」

「犬に買い物頼まれて・・・。」

クロームがメモを見せた。

チョコ

ガム

ガム

ガム

ガム

(これってただのパシリじやあ・・・。)

「そついえ、ボス・・・双子の子が・・・？」

「あー、もうワボーンに聞いたかな？そづ、転校してきてさ。」

「黒曜中にもなんか・・・」

「え？ 黒曜中？」

「黄色の髪の双子を知らないか？ って聞かれた・・・」

「え？」

「誰だ？？」

「調べてみまスか！10代目！！」

～双方の才能来る！～（後書き）

ねっと、新キャラのにねこ・・・ww

楽しみにしてくださいね～

では寝ます（笑）

読んでくださいありがとうございましたあ～ノノ

ヽ ク来る！――（前書き）

ぱつぱかぱ～ん

記念！！10話めですっ w

10話めの記念（？）に新キャラ登場です～ w w

だれかな～？？ w w

にしましたよ w w

では、、どうぞ～ w

「ク来る！――」

「それにしても……誰だろ？・リンとレンに」と聞いた人……

「

「まさかもうファミリーにばれたんじゃ……」

「ん？なんかヤベーのか？？」

「このノーハンバカ！！火種になるつてリボーンさんから聞いただろっ――！」

「ん？ああ――そつだつけな？」

しかしこのときツナはあまり危機感を感じていなかった。

その「」のレン達は。。。。。。

「野球部入りたいな」。。。

「やめとけって。また騒ぎ起すだろ？」

「あ、でも騒ぎ起」したら雲雀さんが来る。。。

リンの顔が明るくなつた。

「あのなあ・・・・・！」

言い合ひしてゐる2人に人影が忍び寄つてゐた・・・・

リンが肩をポンと叩かれた・・・・瞬間リンは仰天した・・・・

「とりあえずあの二一人ガードしといたほうがいいですかね?」

「・・・・・ナカ・・・・・ん！」

遠くから聞こえる声にツナが耳を傾けた。

「ツバキヤのやんすん！」

「リンク！？」

猛スピードでリンが走ってきた。

その後ろには緑色の髪をした女の子が走ってきていた。
その横にはレンも・・・。

「リーン！」

緑色の髪の女の子がリンをよんだ。
よく見たら黒曜中の制服だ・・・

「ミク姉！……髪の毛・・・！」

「「」」

「ミク姉髪の毛切ったの！？」

「はあ・・・疲れた・・・あんた相変わらず速いわ・・・」お面でちよつとおどかしただけなのに、そのあと一瞬で声届かないといろまで走つて行っちゃうんだもん。」

「リンは一回混乱するときかないから・・・・」

「あの、、黒曜中の人ですか・・・?」

ツナがおもむおもむ聞いた。

「え？」

リンとレンが声をそろえて言つたと懇つたりハクを連れてゴンゴン話し始めた。

「中々 ビジウムだよー。// 姉 16 だろー。」

「やあ～！～事情があるんだって！～今から沢田君たちに話すから～」

「ツナにも……? 達って……獄寺君や山本君もか?」

「そうそう。中学に入るためには髪の毛切ってショートにしたんだから~」

「関係なくね？」

「おこ……何ソソソしてんだよ……」

獄寺が呼びかけた。

するとミクが小走りでこっちに来た。

（）二つの髪の毛もすげーのな・・・（）

「このたびイタリアから日本に緊急派遣されました！－ボンゴレ門外顧問の、初音ミクです！－」

「「「門外顧問」！？？」？」

ヽ ク来る！――（後書き）

あらり ソウ

まさかのミク門外顧問だわ（笑）

なんかボーカロイド集結しそう・・・

ソウ

リンやレンとはゼー ゆう関係なのでしょうか ソウ

次回をお楽しみに ソウ

読んでくださつてありがとうございました

～過去来る！～（前書き）

まさかのミクが門外顧問（笑）

あ、べつにボーカロイド集結させるつもりではありますよ？？。w
ミクは出したかったです。w

まあみんなに集結してほしいと言われたら・・・。w w

はい、おいで
びわ

「過去来る！――」

「門外・・・顧問！？」

「はいっ！――9代目の指令でイタリアから来るやつを呼んでました
っ！」

「緑色の髪の少女、ミクはおでこに手を当てて敬礼した。

「9代目の指令・・・？なんでだ？」

「ハツ！鏡音姉弟のガードですっ！――」

「「え？」」「

「俺が9代目に教えたんだ。」

「リボーン！――」

「リボーンせん！――」

「物的証拠が見つかってしまったんでな。」

「物的？」

「リンが持つてるだぞ」

「わっ、私ー？？」

「ペンドントだ。」

「え？ そんなのしてる？」

「リボーンくん・・・よくわかったね。前にこれは肌身離さず付けてる、でも決して見えないように隠せ、って言われたから・・・いつもしまつておいたんだけど・・・」

レンが服からペンドントを出した。それを見ると全員が目を見開いた。

「これは・・・」

「ビッククリだな」

「ボンガルの紋章だ！――――」

「やつなの？？」

「んで、レンも何か持つてんだろう？俺は見てないが。・・・」

「俺はこれだ。」

レンがズボンのすそをめくつた。

「アンクレットか・・・」

「これもボンガルの紋章が。・・・」

「私たちこれは小さい時からずっとつけてるの。なんか、付けなきやいけないような気がして……」

リボーンが口を少し結んだ。

「初音」

「はい」

「こいつらにも話す。おまえに頼むぞ。」

「わかりました」

「……さて、リン、レンちゃんひとつ行きたいところがある。付き合つてくれ。」

「ああ。」

「うん?」

そこに残ったミク、ツナ、獄寺、山本は3人を見送った。

「あの……話すことって……?」

「これは……ボスの沢田さんだけにでもいいのですが、お一人も念のため聞いてください。」

「」「?」

「リンとレンは、私の幼馴染なんですけど、もう、かなり会ってなかつたんです。2人は全然普通の生活なんかしてなかつたんですよ。」

「え？」

「何も知らないまま一部の謎のマフィアに狙われてたんです。あの子たちの両親も、その関係でリンとレンが7歳のときに亡くなりました。」

「謎つて……？」

「……私たちも、リンとレンの秘密を知ったのはすごく最近でしたよね。それよりずっと前にもつ知ってるやつらがいたんです。」

「じゃあ今もそこいらに……？」

「今は大丈夫です。……ファミリーにもいろんなタイプがあります、そのなかでリンやレンの一族は特殊で、術師系が多かつたんですね。」

「術師系……？」

「平たく言えば超能力ですかね。炎の波動と一緒に生まれつきの能力があつたんです。その能力で、リンたちの祖父母があのアンクレットとペンドントを作つて守つたんです。そしてリンたちの秘密を知るマフィアも術にかけた。それで今は安全です。しかし、そのアンクレット、ペンドントは次第に力が弱まつてるんです。弱まつてもリンたちの両親が直せてたんですけど……」

「じゃあ……！」

「はい、またリンたちの正体がバレて命が狙われます。もう術師系のファミリーはリンとレンだけなんです。しかしなにも知らない2人では……」

「やばいじゃねーか……！」

「はい……。そこで、沢田さんたちのファミリーにリンとレンを入れてほしいんです。」

「んなつー…？」

「リンとレンはもう知ってしまったからには術師系の能力を覚醒しないやいけないんです。」

「でも俺らなにも……！」

「私が2人の責任を持ちます……沢田さんたちはもしもの時のために……」

「……」

「10代目……ビルします？」

「んなつー…俺！…？」

「そりゃあツナがボスだからなつ」

「でも心の声われたら……」

「お願こしめす……」

ミクが頭を下げた。

「わ、わかりました。」

ミクの顔がパアッと明るくなつた。

「ありがとうござめす……」

「ツナたちのフアミニーに入る……? ?

「わうだぞ。」

リボーンがリン、レンにツナたちのフアミニーになるよつて言つて
いた。

「リンの抜群運動神経とレンの頭はいまのツナたちに必要だ。」

「……」「……」

「なんかよくわかんないけど……」

「入つてみるか？」

「うんー。」

「よろしくねーーー。リボーンくんーーー。」

「ああ。 ジハチハチナ。」

（わりいが、これからお前らにはつらに日々が待ってるかもしだ
い・・・）

「その笑顔、忘れんなよ。」

「え？ 私はいつも笑ってるよーん」

レンだけは、直感していたかもしねない・・・・・・・・・・・・

これから日々々々。

～過去来る！～（後書き）

今回長いですねww

リンとレンの秘密が明らかになりました！！
この二人の血は特別ですよw
スペシャル・ブラッド・オブ・ボンゴレww
みたいなw（黙れw

次回もよろしくお願ひしますw

最後まで読んでくださいありがとうございました

～紹介来る～～（前書き）

今回やっさんとスンのやつとした過去公開ですよ～

あのですね～～、

感想更新してあると一矢つこひやうひんぢく（変態じやな）ですか
だつてうれしこんぢゅもん＝
原動力です～

読んでもらいたい人にホントに感謝します

では、

～～～～～

～紹介来る！～

「えつ……そつなのー…？」

「うん、歌を教えてくれたのはミク姉だ。」

ツナとレンは2人で歩きながらツナの家に向かっていた。

「小さい頃に俺たちに教えてくれて……でも、ミク姉が14になつたとたん、会えなくなつたんだ。」

「え・・・？あーもしかしてボンバーの……」

「やつみたいだ。だから2年ぶりだつたんだよ。」

「そりだつたんだ……」

「あのや、ツナー！」

「え？」

「俺たち、なんかこれから先、……うまく言えないけど、もうふつうに暮らせない気がするんだ！レンは……もつ親の一件があつていつも元気だけど、無理してる時もあるんだ。」

「じゃあ今も……？」

「いや、ツナたちのファミリーに入ることせずして喜んでる。ナビ、

俺は、・・入りたくないわけじゃないけど、なんか・・・

俯きかけたレンを見てツナが口を開いた。

「俺さ・・・ついこの間、死にかけたんだ。」

「え・・・・・?」

「俺ら、今のみんなの未来を守るために戦ったんだ。死にかけたし、ダメダメな俺が人類とか、未来とか・・・そんな大きなもの守れるわけがないって思つたんだ。そのときはいいことなんて一つもないって思つてた。でも死にかけたから、痛い思いしたから、守るべきものがあつたから今の俺がいると思うんだ。」

「・・・・・・」

「」の先どんなことがあつても、俺らのファミリーじゃ後悔するようなことはないと思う。レンも、リンも、絶対今より強くなれるよ。

「

ツナが言つてくれたこととレンは少し笑顔を浮かべた。

「あつ、で、でもーー！ボスとかやだしつ、もう死にたくないよーー！？」

「・・・・・ツナ、ありがと！」

レンがまつすぐツナを見て言つた。

「・・・へへつ」

ツナが照れくさそうに笑つた。

「あ

「なつ、何？？」

「遅れちゃう！」

「あつ！ヤバいリボーンに怒られる〜！〜！〜！」

「走ろう！」

「おせんべい前、。

「うめん…」「すんせん…」

全員そろつたな。

(なんでも俺んちに守護者全員集めるんだよ・・・・・)

「あれ？ リンどうした？」

俯いて体育座りしているリンを心配そうにレンが覗き込んだ。

「雲雀がこねえつていつたらずつとその調子だ。」

「ああ～・・・」

レンとツナが納得した。

「さて、じやあ新ファミリーの紹介だな」

「おい！ リン！！」

レンか呼んでもリンは無視した。

(めんどくせえな・・・・)

レンかしゃかんでリンの耳元でなにか囁いた。

そのとたん、リンかハニと立ち上った。

「鏡音リンです!! 14歳!! ファミリーとかよくわかんないけど頑張りますっ!!」

いつものリンのように語る／自己紹介した。

「レンです。よろしくおねがいします。」

「ツナたち三人はもう知ってるからいいな。あとはクロームとア平、京子の兄だ。」

「京子が極限にいつも世話になつてゐる……」

「わあ～～京子ちゃんのお兄さん～～極限ひよひしへお願こしあね～～」

「ああ～～みるしへ頼むわ～～」

（なんかノリあつてゐる・・・・・）

「クローバちゃん? よろしくねつ～（超可愛いんですけどナビミ）」

「・・・・・みるしへ・・・・・。」

「人見知りなんだ。でもいいやつだからな。」

ピンポン

「?誰だ?」

「俺が呼んだんだ。京子たちだぞ。」

「あ～・・・京子ちゃんたち・・・・・あ～～『たち』！～?～」

「10代田～～」こつが・・・・・。」

「またなのな～。」

「「おつじやましま～す」」

京子とハルがはいつてきた。

「ハツ、ハル！」

ツナがあからさまに慌てていた。

「はひ？ ハルの顔になんかついて……！」

レンとハルの目が合つてしまつた。

「はひり……！」

「あ

「やば……」

「ちつ

「おもれーのな

レンの目が変わつた……。

～紹介来る！～（後書き）

なんかツナがボスらしくなつてますねww
10年後ツナにだんだん近づいています（笑）
レンもまたスイッチ入っちゃつた～ww（楽しいw
次回もまたよろしくおねがいします～ノノ

アリヴェデルチw

～戻つて来る…～（前書き）

ありがとうございました

超うれしくて皿から汁が・・www

みんなさんのおかげで、これこまつ

どいわい、これからも、よろしくお願ひします！！

わく、、レンゼビーナッカヤ「うそでしょ」。w

～戻つて来る！！～

—

— 1 —

目が合つてしまつたレンとハルをみて静まり返つてしまつた。
しかしリンとツナと山本と獄寺しか理由は知らない。

「极限にどうしたんだ？」

一
はひつ
！」

2人ともあわてて言葉がおかしくなった。

そこに足音が聞こえてきた。

「ガハハのハッ！！！ランボさんとうじょうだもんね！！！」

一 うるせえな

ゴッ!
!!

「ちなみにあの牛ガキが雷の守護者、ランボだぞ。」

リボーンにどうかれてのびてるランボを指して言った。

ハルが足元でのひてるランボをみて我に返つた。

そして空気がやっと戻った。

「ランボちゃん？かわいしね！」

リンが言つた

ツナはちらつとレンを見たがもうハルを見ていいなかつた。
しかし、微妙に赤面していた・・・のには、ツナも気づかなかつた。

「ムギー!! ハンボさんおしゃれもんね!!」

ランボがリボーンに突進しようとした。。。。そこでレンがランボを優しくつかんで止めた。

「そんなに暴れぬと申たのびちぢみよ。」

やつぱりレンの様子はハルを初めてみた時と同じ、 、 、 、 そこだけ
空気がキラキラしてゐるようだつた・ 、 、

「このつ誰〜？ ランボさんの部下にしてあげよつか？」

「やつしても、もうやつかな」

レンが優しく笑った。

「レン、レン……つざいよ……やめときな……」

「大丈夫、レン、ああみえても子供扱うの慣れてるから。」

リンが言った。

「二人とも立つてないで座つていいぞ」

「うんっ！」

京子とハルが座ろうとした。

座ろうとしたハルの腕をレンがつかんだ。

「ハルはここ」

ハルがまた一気に赤面した。

「まあいい。座つてろハル。」

リボーンが言った。

（レンいつの間にかハルつて言つてる……）

そのあとは特に何もなく、、、

ツナのうちにみんな楽しくレンとコンの歓迎会をした。

でもハルはレンの隣に座つてゐる間、、、恥ずかしがつたままだつた。
。。

*

楽しい時間が終わつた後は片づけ。

リンとレンは主役だつたから先に帰つてもらつて・・・

クロームは・・・

「犬と千種に怒られちゃつから・・・」

と言つて帰つてしまつた。

そして京子とハルが片づけを手伝つてくれてた。

上の部屋はツナがかたづけていた。

「も～・・・なんで俺が・・・勝手にみんなよんだのリボーンじ
やないか～！～」

「あ、ツナくんー。」苦労をまつ

京子が食器をとつにツナの部屋に來た。

「 もう、 京子ちゃん… 」

「 今日は楽しかったね… 」

「 うふーでもレンがまた… 」

「 レン君はきっとハルちゃんが好きなんだね～ 」

「 だひーひね… 」

「 でもみんな仲良くなれたり、 よかつたねツナ君… 」

京子が満面の笑顔でいた。

「 …… うふー… 」

（ やっぱり京子ちゃんかわいい… ）

「 でもそいつ言えれば… なんでツンちゃんとレン君って、 転校してあたんだわい？ 」

「 あ… うつ… 」

（ やっぱりなんかレン達の両親とかの… 関係してるのかな… ？ ）

「 おーい… 帰ったぞー… 」

下の方から声が聞こえた。

「もしかして……」

ツナがビックリした。

「コメン京子ちゃん……お目、ありがとうございます……」

急いで下に降りてしまった。

そして玄関にいくと……

「ようツナ！久しぶりだな！！」

「父ちゃん……？」

～戻つて来る！～（後書き）

レンがまた・・・（（書いてる側はおもしろいです笑

家光きましたが、～、なんかあつたんでしょうつかね？？

ww

次回もよろしくお願いしますつ～！

読んでくださつてありがとうございます♪ぞいました♪

～家光来る！～（前書き）

家光登場

なんんでだつ

来てくださいてありがとうございます

どいりお楽しみください

「家光来る！――」

「父さん～！――？？？」

「よつ～！久しふりだな～！」

「あなた～！」

ツナの母親、沢田奈々が来た。

「奈々～！――」

「あなた～！――」

ツナは感動し合う夫婦をみて呆れた顔をした。

「ツナ君のお父さん・・・？」

「あよ、京子ちゃん～！」

「おお～～キミが笛川京子ちゃんか！ツナがいつも世話をなつてい
る～。」

「いえ、京子さん～。」

「せうひ～～ツナさんのお父さんですか～～？」

（ハルまで・・・・）

「キリは三浦ハルさんだね！ツナが世話をなつていろ。」

「はひつ……そんな」となことです……ツナさんはお世話をなつっぱなしだす！』

（なんで父さん京子ちゃんとハルをしつてるんだ……？……）

「ハルちゃん、きつと家族水入らずで過ごしたいだろ？からでもう帰らうかつ……」

「モツですね……・・・じゃあツナさん、また今度……」

「バイバイ！ツナ君！』

「つ・・・・つん……』

2人はツナの家をでて家に帰った。

「んで！なんで父さん急に帰つてきたんだよ！温泉掘つてたんじやないのかよ！？母さんはもう夕飯の支度なんか始めちやつて！」

「いや～、～～～だ？ツナ！鏡音姉弟は……』

「へー？なんで知つてんの！？』

「俺が言つたんだぞ。』

「リボーン……』

「よ、家光。久しぶりだな。」

「ああーー！ しばりくだな！」

「なんでレンとリンを……」

いやー！ビックリだな！！

（全然ビックリしてるように見えないんだけど……）

「まだあの2人の正体を知ってるのは9代目と俺、ツナたちの10代目ファミリーだけだ。」

「 そ う な の ！ ？ 」

「ああ、氣を付け。畠山はお前がアレセントがあるからな！」

え・・・? られ・・・?

—まあ楽しみにしてろ!—

「プレゼント？」

「うん・・・父さんが、、、何なんだろう?」

「10代目のお父様帰つてきたんですねー!」

「ツナの父さんか！久しぶりだな」

「ツナのお父さんって……」

「すごいの？」

「そつか、レンヒリンは知らないのか！ボンゴロの9代目直属の
門外顧問だよ。」

「へえ……」

「あ、数学の宿題やつてない」

「あ～…………！」

「ま、私のはレンがなんとかしてくれるけどね～」

「は？」

「ね？レン」

リンからの威圧感たっぷりのオーラがレンに向けられた。

「……ああ……」

（（）の2人兄弟そろって黒いな……）

「はつきりしきつて、つたぐ～」

() 惧

＊

「なんだよ父さん～、～、みんな呼んで並盛駄つて～」

「プレゼントだね！ なんだう！」

「よへせたみんなーーー！」

「父さん！！」

「まあ！？」

「アジートー？」

「わ
お

～家光来る！～（後書き）

アジト来ちゃったね w
ツナが作らせたらしいですが・・・そういう疑問は後々・・・（
笑） w

読んでくださいってありがとうございました
またよろしくお願いします w

～未来来る！～（前書き）

更新遅れてすいませんっ！！（泣

宿題に追われてました・・・

レン「最後までためて宿題に追われる典型的なバカの小学生だ」

黒・・・（泣

・・・って、、小学じゃないわ～！！！

おもしろくないコントはおいといで・・・
どうぞ～ノノ

～未来来る！～

「アジトー？」

「あれ・・・でも・・・」

「そうだ！ボンゴレのアジトは10年後のツナが作らせたはず・・・」

「

「お、俺だけ！・・・？」

「セウシスよ！・・・」

「まあ、、それは歩きながら話セウシス。」

そして家光はみんなを連れて歩き始めた。
向かった先は路地裏・・・

「そりが・・・お前らは未来に行つたんだな・・・アジトのことは
なんて聞いたんだ？」

「いや・・・10年後の山本が『お前が作らせたんだぜ？』としか・
・・

「まああそこまで大きくするのはツナだわ。そして今あるのは仮
の少し小さめのアジトだ。あと数年後には・・・ツナもアジトを作
ろうとするだろ？なー」

(俺ボスになる気ないのに……；)

「」の野球バカが！ちゃんと説明しやがれ！」

「俺そんなこといつたのな！」

「しかし未来のアジトは極限す」かつたぞー！」

「10代目のおかげっすね！今から作つてもいいんぢやないっすか？」

(だからなる気ねーつて・・・)

「わあついたぞーーー！」

気づいたらもう建物の中だつた。

わあゝ・・・「」

「これはジカが作らせたアシトの1階分くらいしかなしそう」

いしたゞ！！未来はもうと広がったんだ！！私も未来行きたい

今までしゃべらなかつたリンが口を開いた。きつと我慢してみんなの話を聞いてたのだろう。

「あ～り～？？未来行きたいの～？？じゃあソーニボーグが連れてってあげるもんね～」

ランボが10年バズーカを頭の中から取り出した。

「ランボまでつ・・・!」

ボフン！・！・！

リンに直撃

「…………」は10年後のリンが来るのか…………?」

レノがおもむろおもむろ語った。

「 そ う な る ね 」

煙が消えてきて人影が見えた。

リンの姿を見てみんなみんな驚いた。

あまりにも美女だつたから・・・・・

大人になつたリンは落ち着いた顔つきで体系もすらりとしていた。

「あれ? どうしたの?」

「あの・・・10年前・・・です。」

「ううそ……わわっ！ツナくん……ううわレン君がえー……！」

「……」

顔つきと性格が全く一致してないほど性格は変わったなかつた……

「う……」

ぽたつと赤い滴がリンの腕から落ちた。

「けがしてゐるの……？」

「ああ、ちゅうとやつておまでドンパチしてたから……」

「じゅあ……」

「10年後に行つちやつたリンヤバイんじゅあ……」

「ああ！大丈夫！今アジトにこゝに手当してもいいつていいドーツち
來たからー！」

「よかつたー！……」

「しつかし懷かしいなー！ー！」の仮アジト……あのねーツナくんが・
・・・・・

ボフン！……！

一
え

一 床 こ て き た な

(なんか俺のこといいかけた
・・・・?)

リンは、二、三、むして体が縮こまる、てゐる状態だった。

それは
・
・
・
・
・

～5分前にいた10年後世界での14歳のリン～

卷之三

—リ・・・ン?』

「10年前のリンガ!!!!!!」

サクンイケメンだあれ!!!

- 10 -

「つか手に何持つてんの？」

「ああこれは……リンが怪我してたからこまかに手当するといいんだ
つたんだが……」

「あ～私10年後でもよく転んでたんだ！」

「いや……そんな軽い原因じゃあ……」

バンッ

部屋のドアが大きな音を立てて開いた。

「あ、雲雀さん……」

「…………」

リンの顔が一気に赤面した。

雲雀がリンをじーっとみた。

ボフン…………

というわけだ。

（やばいやばいやばいやばいやばい……なんだあの人……あのカツコよそは罪だ……）

た。リンが真っ赤になりながら10年前に戻つてきても余韻に浸つてい

「お楽しみのところ懸こが~」

家光が言つた。

「 に何のために来たか……！」

卷之三

「特訓だ～！！！！！！！」

～未来来る！～（後書き）

ふう・・・

読んでくださつてありがとうございました！！

特訓ネタおおいな・・・（笑）

気にしないで下さい（笑）ww

では、次回もよろしくお願ひします～！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6785u/>

歌が上手な転校生

2011年10月9日02時09分発行